715
71
715-71
1200501585682

科學的人生觀を訊く

醫學博士
理學博士 額田晉氏に

486

科學的人生觀を訊く

醫學博士
理學博士
額田晉氏に

昭和十一年一月 寄贈本

715
71

序

本文は科學に立脚した人生觀に就て、雜誌現代の記者諏澤氏が額田博士に訊したる應答の速記で、現代（昭和九年二月號）に掲載されたるを、多少增訂したものであります。

自然科學の驚くべき發達から、既成宗教を離れ行く、賴りなき近代人の群に呼びかける額田博士の切切の言　犀利詳細を極めたる蘊蓄、無軌道の青年男女をして心を安んじて賴らしむる生活原理とは、卽ち此科學的人生觀であります。

編者しるす

目次

森鷗外先生の死……一
科學と宗教は相反するか……六
科學の立場から……九
自然界と法則……一三
偉大なる無形の力……二〇
科學的に見た生と死……二四
正しき人間觀……二九
美化された人間の本能……三五
大自然の動向と人類の使命……三八
生死を超えて……四四
心の修養と社會的知識……四七
より良き社會の建設へ……五二

額田晉氏に科學的人生觀を訊く

記　者

問　先生が最近新しく科學的な死生觀とか人生觀とかを提唱され、廣く世の中にお弘めになつて居るといふことを聞きまして、それらについて先生から是非いろ〳〵伺ひたい。斯ういふお願で上つた譯です。

先づ、先生は醫師として、人間の「死」といふ最も深刻な場面に度々遭遇されませう。さういふ患者の「死」に直面した場合の先生の御氣持はどんなですか？

森鷗外先生の死

答　多くの病人を看て居りますと、癒る病人も無論澤山あるが、どうしても癒らぬといふやうなこともある。さういふ時には大抵の者は慌ててしまつて可哀相なのです。どうしても癒らぬ、死ぬといふことが分つて居るのに、非常に慌てて現實社會への執着がひどくて見るにしのびない。

どうしても癒らぬといふことが分つて居るならば、それこそ從容として眠るやうにさせたい。癒る病人ならば手を盡して癒さねばなりませんが、どうしても助からぬ病人ならば、安んじて死につくやうにさせたいのです。癒すばかりが名醫ではない、どんな人でも結局は死ぬのですから、その時見苦しくないだけの死に方をさせなければならん。助からぬ病人に安んじて大往生を遂げさせ得る人であつてこそ本當の名醫であると思ふ。

今まで私が看て一番感銘したのは、森鷗外(林太郎)先生です。先生は一生の内で醫者にかかつた事が一度もないと云はれて居りました。亡くなられる一ケ月程前に私が伺つた所が、自分の死を既に知つて居られ、「家の者が騒ぐから診て貰ふのだが、君の手で最後まで看て呉れ、助手を使つてはいかぬぞ」といはれました。それから後も先生は病臥のまま傍で筆記を取らせ、著書の完成に努力せられました。ずつと容體が悪化してからも「暑いのに御苦勞さま」とか「そろそろ險悪になつて來た」などと云つて平然として居られました。

私は鷗外先生の死を觀て、死を視ること歸するが如しと云ふのは是である、人間は死に直面しては斯うなければならぬと沁々と考へさせられ、深い感銘をうけました。

問　普通の人はさうは行きませんか？

答　普通の病人は、まだ吾々が癒ると思つても、血を吐くとか、何か少し悪いと言はれると、もう死にはしないかと慌ててしまつて餘計悪くなる場合があります。人事を盡しても及ばず、どうしても愈々死ぬといふ間際になつたら、是はもう天命であるから已むを得ないと諦めて、悠々と死につかせたいと思ふのです。死に直面してもがく有様はとても可哀相で觀て居られません。是は普段から人生觀殊に生命觀といふものがしつかりして居ないからで、「死」といふやうなことを靜かに考へたことがないからです。かういふ點からしても是非ともすべての人は「生命」といふことに關して平素からしつかりした考を持つて居る必要があるのです。

去る大正十二年九月一日、その日には關東地方に突然大震火災が起り、多大の物的財寶は忽ちにして灰燼に歸し、多數の人命は夫が爲に失はれたのでありました。あのやうな悲慘な出來事は度々起るわけではないが、

そんな場合に出會はないでも、よく考へて見れば、永遠に往くものは人の世の流れであり、誰の身の上にも來るものは死であります。實に老若男女を問はず總ての人は、考へ方によれば日一日と死に近づいて居るのですが、多くの者はそれを忘れて只眼前の物質的慾望を滿足さす事にのみ心を奪はれて居るのです。それでは死に直面して慌てる筈です。のみならず死に徹底しなければ眞(まこと)の生はわからない。だからすべての人は普段から生死の問題をよく考へて、生命觀といふものを持つて居なければならぬのです。そして生死といふものを超越し、生命をば非常に大切にするが、一面に於ては死を恐れないといふ安住の境地に達して居なければならないといふことを私は考へて居る譯です。

問　今の若い人達は宗教心がない譯ではないが、今までの宗教には賴らうといふ氣持にならないのではないでせうか。

科學と宗教は相反するか

答　宗教心のない者はありますまい。ただ十五六世紀の所謂文藝復興期の頃から漸次に自然科學といふものが非常に旺んになつて來て、その結果、既成宗教に賴る氣持がだんだんと薄くなつて來たのです。宗教は固より心の問題であり、自然科學は自然界の物的現象、卽ち物質を對象として研究するのであるから、宗教と科學とは全然反對の立場にあるやうに皆が考へた爲です。しかし本當に自然科學をしつかり研究すれば、それは決して宗教と相背馳するものではない。科學の進歩は終局に於て宗教的なものに一致するのです。ただ、しかし今日科學の方はどんどん發達して、無線電信も出來れば、ラヂオも出來る、飛行機も飛ぶと云ふやうに、盛んにデモンストレーションをやつてゐるので、科學の力とい

ふものは誰にでも直ぐ解る。

所が今日の宗教といふものは、二千年も前のままを蒸し返してゐるので、科學的の頭のある現代人にはぴつたりと來ない、詰り今日の人は科學の力は認めるが、宗教と云ふものを無用のものとして振り向かうとしないやうになつてゐる。その結果はどうかといふと、物質的の方面に幻惑されて、人生といふものはどういふものか、人間はどういふ所に心を置いて一生を進んで行けばよいかといふことが解らなくなる。

では人々は果して物質のみに生きる事が出來るであらうかと云ふに、事實は決してさうでない。世の中に出て事業に成功し巨萬の富を得たとしても、夫れのみでは未だ眞の心の滿足が得られないのが實際の狀況でありますし、又昨日までは物質に惠まれて居た者が今日は悲慘のどん底に陷るといふ例も決して尠くありません。尙此世の中に於ては近親の死、

友人の死などに遇はない者は殆んど無いのでありますが、斯る際に果して何が眞に自分の心を慰め力づけてくれるでありませうか。人々は心の中に何物かを求めながらその何物であるかを知らない有様であるのです。

我國に於ても昔は寺小屋で教育が行はれたから、そこには自ら宗教的背景があり、習ふ學問それ自身が心の修養になつて居たのでありますが、今日の學校教育に於ては修身はあつても何となく力がなく、化學や物理學や、法律や經濟學等々は人間に理屈や智慧を與へるけれども、それ自體人間の歩むべき道を教へてくれない。それが大きな缺陷で、從つて現代の人は人生の意義に關する信念がないから、理屈や智慧を持ち合せて居てもそれを如何に使用してよいかわからずに皆んなが迷つて居る。

今人生を以て大海を航海する船に喩へるならば、現代人の生活は恰も舵なくして大海を航海する船の如きものであります。云ひ換へると、理

智に富んで居て、而も信念に缺乏して居るのが現代人の相（すがた）であり、道德や藝術やを意識の中に持ちながら心の據り所を失つて居るのが今日の所謂知識階級であるといふことを私は感じて居るのです。

今までは自然科學の發達の徑路にあつたのでありますからそれも已むを得なかつたでありませうが、もう今日では科學といふものは相當に發達して居るのですから、吾々は科學の立場から「人間といふものは斯ういふものだから斯ういふ所に心を置いて一生を過せばよいのだ」といふことを考へ直して見る必要がある。それが今日の人々にとつて最も大切なことであると思ふ。

科學の立場から

問 先生は既成宗教をどういふ風にお考へになつて居られますか。

答　既成宗教の今の說き方では、その言つて居る內容はよいにしても一般の人々に科學的の頭が出來て居るから何となくぴつたりと頭の中に這入りにくいやうに思はれます。今日では寧ろそれを科學的に說いた方がよいと思ひます。卽ち神や佛とは云はないで、其の代りに自然界に於ける法則の存在を說いたならばよいのです。私の人生觀は自然觀と、生命觀と、そして人間觀とから成り立つて居りますが、其中で自然觀は少しわかりにくいかと思ひますが、順序として自然觀から述べて見ませう。

凡そ自然界に於て吾々が認識する所のものは、星と月と太陽と地球とであります。そして地球を構成するものは大別しますと土と水と空氣と生物です。それ故に自然界は物質から成り立つて居るとも云へるのですが、然し其の中には無形の偉大なる力が潛在して居るのです。自然界に於けるあらゆる物質は、生物でも無生物

でも總てが法則に依つて支配されながら存在して居る。また自然界の現象は色々と變化して止まないが、それは總て法則に依つて支配されつゝただ外觀が變化して居るのです。どんなものでも法則に依つて支配されないものはない。法則そのものは物ではない、法則は無形の偉大なる力である。それは神秘なる絕對的の存在である。それで盡して居るのです。

詰り宇宙間のどんな小さなものでも、またそこにどんな變化が行はれたとしても、いつでも無形の偉大なる力が宿つて居るといふことを、しつかり摑まへればそれでよいのです。それを法則といへば、科學を修めた人の頭にぴつたりと來る。自然科學の目的は眞理の探究にあると云はれて居りますが、法則は眞理の現はれであり、自然科學の研究はその法則を見出し、且一面に於てそれを應用

することを努めて居るのです。物理學や、化學や、或は生物學などは何れも自然科學に屬するのですが、試驗管内に起る反應や、顯微鏡の下に展開せられる美麗なる像は、何れも自然界に於ける法則の存在を吾々に物語つて居るのだと云ひ得るでせう。自然科學といふのは、事實を記載する學問であるといふけれども、記載するのは研究の第一歩で、其處にどういふ法則が存在するかといふことを見出さうと努めてゐる譯です。要するに、自然界には偉大なる無形の力が潛在して居り、その無形の偉大なる力を見出さうと努めて居るのが自然科學であるのです。

問 詰り自然科學が發達して行けば行く程宗教的な偉大なる力を發見することが出來るといふのですね。

自然界と法則

答 さうです。自然科學が發達すればする程自然界に於ける無形の偉大なる力の存在を確認する事が出來るわけです。

昔の偉大なる人格は、釋迦でも、キリストでも、その無形の偉大なる力の存在を直觀して、佛とか神とか言つたのだと私は想像する。その頃は科學がなかつたから、直觀によつて佛とか神とか云つた。その靈感といふものは實に驚嘆すべきでありますが、今では科學といふものが發達して居るから、其の力によつて自然界に於ける法則の存在、卽ち無形の偉大なる力の存在を確認する事が出來るのです。

先づ天體の運行に就て考へて見ても、其處に偉大なる法則が存在して居る事は是は誰が考へても慥かであります。あんな無數の星にしても一定の法則に從つて秩序整然とそれぞれの方向に動いて居り、吾等の住む地球も月や太陽と同樣に一つの星に外ならないのですが、その地球は一

つの惑星として自轉しながら一年三百六十五日――違ふ事なく恒星たる太陽の周りを廻り、月は更に一つの衛星として自轉しつゝ三十日で地球の周りを廻つて居る。それはニュートンによれば、萬有引力の法則に支配されながら動いてゐるのです。地球上の色々なものにしても、すべて同樣な法則に依つて支配されて居りますが、特に之を重力の法則と呼んで居ります。斯くして自然界に於ける萬物は、生物たると無生物たるとを問はず、また固體でも液體でも氣體でも、悉く偉大なる法則に支配されながら存在して居るのです。

次に物質が如何にして成立したか、即ち物の成立を元に遡つて考へて見ると、其處にも神秘なる無形の偉大なる力の存在を否定する事は出來ない。即ち地上に於て吾々の目に映じ、手に觸れる所のものは、一見千姿萬態でありますが、すべての物質はそれを根源的に考察するならば、

水素、酸素、炭素、窒素や、ナトリウム、カリウム、鐵、鉛等々の如き僅かに九十二種の元素と其の化合物に過ぎないのです。元素又は化合物の性狀を備へた最小の單位が分子で、分子は更にそれよりも小さい原子より成る。なほ近年ラヂウムなる元素が發見されて以來放射線の研究が行はれ、その結果原子の構造も亦明かになりました。即ち原子は眞中に微粒子なる陽電性の核があつて、その周りを陰電氣を帶びた電子が非常な速さで廻つて居る、丁度太陽の周りを地球が廻つてゐるやうに。それが原子の構造です。尙電子は何れの原子にも共通であると一般に考へられて居ります。近頃はその外に中性子なるものも發見されました。

それですから、つまり不可分性の非常に小さな微粒子があつて、その集まり方の如何に依つて此世の中に色々な物が出來て居るわけです。斯やうな物質成立の法則を考へれば、そこに神秘なる偉大な力が宿つてゐ

るといふことは、誰にでもわかる筈です。それは科學的に冷靜に考へれば誰一人疑ひ得ないのです。

それから吾等の住む所には春來り、夏過ぎ、秋去りて冬となり、地上に於ける物的現象は絶えず流轉し變遷して止まぬのですが、その色々の現象や變化、それも皆偉大なる法則に支配されつゝ行はれて居るのです。茲に物質不滅の法則と云ふのがありますが、それは地上のあらゆる現象に際し物質は毫も生成又は消滅しないと云ふのです。譬へて見ますと、庭の樹木が大きくなつたとしてもそれは葉と根から炭酸や、水や、色々の無機鹽類などの養分を吸收してそれを自分の體に同化した爲です。決して新たに物質が發生したのではありません。また木材が燃燒して少し許りの灰分のみを殘したとすれば、夫は物質が酸化分解して炭酸瓦斯などの瓦斯體と灰分とに變化したので、何れの場合にも本質的には毫も物

質が生成又は消滅したのではない。地上に於ける物的現象は、絶えず變化を示して止まないが、それは單に外觀上のことで、之を根源的に考察すると、すべての現象に際し、物質は常に不生不滅であるのです。

夫よりもつと根本的な法則にエネルギー不滅の法則と云ふのがあります。例へば人間は體溫を保ち、運動し、また思考する。それにはエネルギーが必要である。それは何處から攝つて居るかと云ふと、食物から攝つて居る。食物のカロリーと云ふのは其エネルギーの量なのです。吾々の食物は何かといふと、それには米、麥、豆、芋のやうな植物性のものと、魚肉、獸肉、鳥肉、卵のやうな動物性のものとあるが、動物は植物を食つて生存して居るのであるから、つまり吾々は直接又は間接に植物からエネルギーを得てゐるのです。そして植物は葉と根から吸收した養分を合成する際.——例へば葉綠體の作用によつて炭酸と水とから澱粉

を合成する際に、――太陽のエネルギーを化學的エネルギーとして貯藏して居るのであるから、結局吾々が體溫を保ち、運動し、また思考したりして居るのは、太陽のエネルギーに依つてやつて居るのです。

それから蒸氣機關を例に取ると、是は石炭のエネルギーが一部は熱のエネルギーとなり、一部分仕事のエネルギーに變つて居るのである。それでは石炭のエネルギーは何處から來たかと云ふに、石炭は太古の植物であるから、やはり其含蓄するエネルギーの源泉は太陽から得たのです。夫れ故に太陽のエネルギーに依つて蒸氣機關が動いて居る譯です。また電車が走つて居るとすれば、それは電氣のエネルギーが仕事のエネルギーに變つて居るのである。その電氣が水力で起されたとするならば水の持つて居た位置のエネルギーが電氣のエネルギーに變つたので、その水は雲から來り、雲は太陽の熱を受けて地上から蒸發した水であるから、

此場合にも結局太陽のエネルギーに依つて電車が動いて居るわけです。

斯やうにして地上に於ける諸般の活動は、殆んど悉く太陽のエネルギーによつて行はれつゝあるのです。そしてエネルギーには、化學的エネルギー、電氣的エネルギー、仕事のエネルギー、熱のエネルギーなどあつて、種々な形に變換し得るものですが、其全體の量は增しもしなければ減りもしない。是は所謂エネルギー不滅の法則です。さういふやうに外觀上色々な變化をしたやうに見えても、物質は常に不生不滅であるし、エネルギーも亦不滅であるのです。

註、最近の研究の示すやうに、或る條件の下では物質がエネルギーに變化し、又エネルギーから物質を生ずる事が可能であるならば、物質不滅の法則よりもエネルギー不滅の法則の方が根本的であります。

偉大なる無形の力

斯やうなわけであるから、自然界は物から成つて居るのではあるが、自然界のあらゆる物質は無生物でも生物でもすべて法則によつて成立し、皆法則に支配されながら存在して居るのである。また地上の色々の變化や現象といふものも、法則に依つて支配されながら起つて居るといふことは確かである。その法則そのものはものではない、是は偉大なる無形の力である。神秘なる絶對的の存在である。自然界に於ける法則は未だほんの一部分しかわかつて居ないので、わかつて居ないから吾々は科學といふ一つの方法に依つて此偉大なる無形の力を部分的に見出さうと努めて居る譯です。

これまでは神とか佛とか云つて居たが、自然界に於けるあらゆる物質、それは生物であつても無生物であつても、固體でも液體でも氣體でも、すべて無形の偉大なる力に依つて出來、それによつて支配されて居るといふことをしつかりと心の中に掴めばそれでよいのです。現代人のもつべき人生觀の根本はそれである。尠くともそれは私の自然觀であり、私の人生觀の根本はそれであるのです。よく人は神とか佛とか、さういふものがあるかないかなど議論をする者があるやうですが、法則の存在は誰一人疑ふ者がない筈である。今日法則の存在といふことを言つて頭に這入らん人はないであらう。その法則は言ひ換へれば無形の偉大なる力、神秘なる絶對的の存在で、それは實に眞理の現はれであるのです。學校で教へる物理學や化學はさう云ふ意味から云ふと、人生觀の根本概念ともなるのです。

化學や物理學や生物學ならば現代人は納得するが、私はそれでよいと思ふ。自分自身も亦自然の一部分であること、そして自然界には無形の偉大なる力が潜在し、自分も亦其力によつて生じ、其力に支配されつゝ存在して居る事を心の中にしつかりと摑み、其處に心を置けば自ら心の據り所が出來て來る。人々よ、心の中に祈れ。己が心を無形の偉大なる力に通はせよ。己が心を自然界に潜在せる無形の偉大なる力に通はせて居れば、自ら人生の悦びと力とが生れ出づるのであります。

よく文章を書く人が「心はよく自ら天地に通じ山河を動かす」などと言つて居るが、自分と言つてもそれは自然の一部分であるから、考へ方に依れば天地山河は元々自分と一體なのである。路傍に轉つて居る石塊や、一滴の水にしても、同じやうに悉く自然

の法則によつて生じ、法則に依つて支配されながら存在して居るので、科學的に考へればさういふことは少しも不思議ではないのです。

今や物理學は物理學の爲の物理學ではなく、化學は化學の爲の化學ではなく、生物學は生物學の爲の生物學であつてはならないのです。それは實に人生問題の根本概念ともなるのであつて、今日の人々に與へられたる最大の任務は、それ等を總括して正しき自然觀を把握することであると私は信じて居ります。

問 大變よく分りましたが、今までの宗教に代るものとして一般の人に充分得心がゆきませうか、も少し賴りになるやうな點がほしいと思ひますが？

科學的に見た生と死

答　これからの人には充分納得出來ると思ひます。然し今迄お話したのは主に自然觀でありますが、自然觀のみではまだ充分でなく、其上に尙正しき生命觀と云ふものが必要なのです。生命の本體は今日まだ分つて居ないのですが、吾々は一定の性質を有するもの、即ち刺戟感應性、運動性、物質代謝、生殖などの如き基本性質を有するものを生命あるものの即ち生物と呼んで居るのです。

生命の起源に關しては生氣說と機械說とがあります。機械說によれば生命の源は身體を構成する物質的要素に備はつて居るのであると云ひ、また生氣說によれば或る生氣と云ふやうな未知のものが外界から這入つて來て生命となるのであると主張します。その何れが果して眞であるか

は議論の存する所でありますが、尠くとも次の事だけは確かです。即ち生命がある爲には物質が或る組合せを作つて集まつて居る事が必要で、言ひ換へますと、物質が或る一定の組合せに於て集まつた所にのみ生命なる機能が現はれて來る事は確かであります。そして凡そ生あるものは必ず死があるので、即ち或る時間を經過すると物質の組合せが崩れ、生命は失はれて物質は自然に還るのです。それを吾々が死と名づけて居るのです。生命のある間も、死後も、すべては大自然の法則に從つて流れて行くので、尠くとも肉體といふものは物質不滅の法則併びにエネルギー不滅の法則によつて支配されて居る。此點は無生物と同じであります。

一面から見ますと、個體は死しても生命は次の時代に傳つて居るのです。即ち個體を構成して居る大部分の細胞は、或る時間を經過しますと

物質の組合せが崩れて生命なる機能を失ひ、物質は自然に還るのですが、一部の細胞のみは個體より離れて新たなる個體を形づくり、斯くして生命は子より孫へと傳つて行くのです。一人の人間が生れては自然に還り、又次の人間が生れては自然に還る、――斯やうにして段々に次から次へと生命が傳つて居る譯です。其狀態は丁度波に譬へる事が出來ませう。水は自然、個々の波は一人一人の人間と思へば宜しい、一つの波が生れては自然に還り、又その次の波が出來ては自然に還る。丁度波に譬へればよいのです。

個體の發生を考へて見ると、個體は卵細胞の發育したもので、胎生期には母體より其の榮養を受けて居りますが、生後は外界から食物を攝つて自分の體に同化しつゝだん〳〵に成長し、小兒期より青春期を經て成

人期となり、それより老衰期に入つて遂に死に終るのです。

個體の死、それは失くなるのではなくて、唯形が變つて行くのである。生命の本體、それは解らない、今の所解らないけれども、身體を構成せる要素は死によつて無くなるものではない。科學的に見れば其の場合にも尠くとも、物質不滅及エネルギー不滅の法則が適用せられるわけで、從つて死といふ現象によつて、物質はその組合せが崩れて自然に還るとしても、死後とてもやはり生前と同樣に、大自然の法則に依つて支配されて居ることは確かであります。それ故に死によつて只其形態が變化する事を考へ得るのみであります。

要するに、一人一人の人間は大自然の永遠の流れの中に現はれた一つの波であるとしか考へられない。死によつて個體としての姿が變る事は人生に於ける最も悲しい極みではあり

ますが、靜かに考へて見ると、個體を構成せる要素は死後とても永遠なる大自然の法則、神秘なる絶對的の力によつて支配されつゝ何等かの相（すがた）に於て存在するのであるから、吾々は須らく此無限なる大自然の永遠の流れの中に我れを托して安心立命すべきであります。そこの所をしつかりとよく考へよ。然らば自ら死生觀といふものが出來、斯くてこそ自我を大自然に合體せしめ、生死を超越したる安住の境地に達することが出來るのであります。

問 只今のお話で、死生觀それさへわかればよいといふことは、吾々に肯づけます。しかし、それを文字通り解釋すると斯ういふやうにならないですか。自然の法則から觀ると人間も物質の或る組合せに過ぎない、さうすると、犬も、人間も、机も、何も彼も自然の法則によつて出來ただけのもので、人間として奮發して活動しなければならんと云ふ、人間

の努力を無視するやうになりませんか？

正しき人間觀

答 そこなのです。だから次に正しき人間觀と云ふものが必要になつて來るのです。

先づ吾々がお互に此世の中に人間として生れて來た、其事が既にもう非常な感謝に値することなのです。地上に於けるあらゆる存在物の中で人間程よく出來て居るものはない。謂はば人間は自然の作りなせる最高の藝術なのです。こんなによく出來て居るものは他にはない、自分といふものが大自然の永遠の流れの中に人間として生れて生きて居ることは、其事が既に非常に感謝すべきことなのです。生命は尊い自然の贈り

物であると云ふ事を知つたならば、吾々は生命をば何處までも大切にして、一生を最も有意義に過さなければならぬといふ考が起るのであります。また生に對する感謝の心があればこそ、親を大切にし、祖先を崇拜する念が湧いて來るのであります。

人間の身體は之を物質的に考察するならば、蛋白質、脂肪、含水炭素、水、鹽類などの分子の組合せから出來て居り、それ等の成分の集まり方によつて夫々筋肉や骨などの細胞となり、組織を形成し、胃や、腸や、肺や、心臟や、腦神經などの器官を構成して居るのです。食物を攝取し、夫れを消化吸收して自己の體に同化し、一方空中の酸素を吸收して物質を酸化分解しつゝエネルギーを出して生活機能を營む有樣や――それには酵素やコロイドが重要な役目を演じて居る、――更に內分泌や自律神經系によつて器官相互の連絡調整を圖るなど、その微妙なる有樣は、微

に入り細に亘つて觀察すればするほど悉く驚嘆に値しないものはありません。

また吾々は美しき色を視、樂しき音樂を聽きますが、色は光による網膜の刺戟が腦の一定の部分に傳達せらるゝ時に起る感覺であり、音は空中の音波による鼓膜の振動が傳達せらるゝ時に起る感覺であると知る時、誰かその精巧なる機構に驚かない者がありませうか。

更に人間の精神機能に至つては一層驚嘆すべきものがあります。進化說に依ると、人間も單細胞動物から進化して來たものであると謂はれて居りますが、今日現存する動物と人間とを較べて見ると、胃や腸や心臟や筋肉などは原則的に殆んど差異がない、只非常に違ふのは腦の中樞の働きである。卽ち人間では腦の中樞の機能が非常に發達して居て、到底他の動物の比ではありません。其中でも運動をしたり、痛みを感ずると

いふことは大して違ひはないが、「考へる機能」は鳥獸と非常に違ふ、それが「心」となつて現はれるのです。

人間の心の働き、精神機能！　そこには認識力あり、理解力あり、注意力あり、記憶力あり、想像力あり、思考力あり、判斷力あり、それから快、不快、喜び、悲み、乃至は憧れ、惱み、同情などの如き複雜なる感情や情緒、並びに意志の作用などがあります。斯くの如き卓越した驚くべき精神の機能によつて人類の文化が建設されたのでありまして、主として認識の力によつて科學が發達し、意志の働きによつて道德や法律や經濟が生れ、尙感情の方面に於ては宗教や藝術の發達を見たのであります。

更に一面から觀察するならば、人間は理想に基いて行爲をする。そこに人類の特長があるのです。それでは理想とは何ぞやといふに、それは

大體に於て眞・知・善・愛・美——此の五つに分けて考へる事が出來ます。此五つの理想の完成に向つて努力することが人間の特長であり、其尊い所以であるのであります。

「眞」とは眞理の探究で、卽ちまだ判つて居ない自然界の眞理を見出さうと努めることで、それは人間しかやつて居ない。今日の自然科學者の努力して居る所はそれに屬します。

次に「知」とはすべての事柄に關して正しい知識を得んとする努力である。これも人間のみに見られる事なのです。吾々が行爲をするに當つては常に正しき知識が必要である。如何に善行をしやうと思つても、正しき知識がなければ却つて善行にならぬ恐れがある。

「善」とは善き行爲をしやうとする努力で、卽ち社會の爲め、國家の爲め、若いては全人類の爲に善行をしやうとする努力である。只消極的な所謂

道德家と云ふのではなく、自ら進んで社會の爲に、國家の爲に善行をしやうと努める事である。それには正しい知識と云ふものが必要になつて來る。吾々はいくら善い行ひだと思つても正しき知識がなければ、動機は善くても結果は惡くなるかも知れない。動機が善くても結果が惡ければ知識が足りなかつたか、或は不注意だつたといふ點に責任を負はなければならない。動機も善く結果も善くてこそ始めて善行と云ひ得るのである。それ故善行を爲すにはどうしても正しい知識が必要である。知と善と兩々相俟つて社會の爲、國家の爲、はた全人類の爲に努力しやうといふことは是は人間にしか見られないのであります。

「愛」は隣人に對するに愛を以てする事で、これも人類のみに見られる事です。隣人に對する愛は、やがては社會に對する愛、國家に對する愛、人類全般に對する愛になるのです。さういふことは動物には見られません。

「美」とは藝術、卽ち詩歌乃至繪畫、彫刻、音樂など——さういふものに依つて人間生活の內容を豐富にしやうとする努力であり、是も亦人間にしか見られないのです。

此の五つの理想の完成に向つて努力するのが人類の尊い特長であります。然しながら一面から觀察すると、人間も動物である。隨つて動物に共通な根本性質を二つ持つて居る。其一つは生命を保持して行く事、他の一つは種族の繁殖を計る事、これであります。生命を保持する爲には毎日のパンを得なければならない。明日のパンは自分自身で得なければならぬ。それが財產に對する所有慾となるのであります。また種族の繁榮——それは戀愛、結婚問題となつて現れて來る。

美化された人間の本能

ところが此動物に共通な二つの本能的慾望も人間に於ては非常に美化され理想化されて居る。即ち明日のパンを得る爲の努力をば社會の爲、國家の爲の努力と一致させることが出來る。さういふことは人間にしか見られないのであります。動物は他を蹴とばしても先に行くが、人間は自分自身のパンを得る爲の努力をば社會の爲、國家の爲、はた全人類の幸福の爲の努力と一致させる、かくして非常に美化され理想化され得るのであります。

次に種族の繁殖に關しても人間にあつては著しく美化され理想化されて居る。即ち結婚生活に於ては子供が生れるといふそれだけではなくして、身を修め、家を齊へ、そして子女を愛育する中に、いつの間にか愛といふものの體驗が出來る譯です。それ故に結婚は愛の體驗なりと云ひ得るのである。

その愛は軈ては隣人に對する愛となり、社會に對する愛となり、國家に對する愛となり、廣く言へば全人類に對する愛となるのであります。そこで人間にあつては結婚生活の體驗が愛といふことの實行を促すことになり、それが何時の間にか人類の理想の一たる愛といふことと一致して行く譯であります。

それからもう一つ異性を想ふ情はやがては藝術の發達を促して居るのです。是は歌などでもさうで、即ち詩歌の始まりは異性を想ふ情に始まるといはれて居りますが、夫は單に歌許りではなくして、繪畫でも彫刻でも音樂でも皆同樣であります。斯くして生物に共通な種族の繁殖を計る本能が基となつて現はれて來る異性を想ふ情も、人間にあつては何時の間にか美化され、理想化されて「美」といふ理想に一致して居ります。

人間も一面から見れば動物であるから動物に共通な生命の保持、種族

の繁榮――此二つの基本性質を備へて居りますが、動物ではそれが本能的慾望としてのみ現はれて居るに反し、人間にあつてはそれに伴つて起る行爲が、非常に美化され理想化されて居り、殆んど前に述べた五つの理想に合致して居る。そこに始めて人間の尊い所があるので、これが個人としても理想化された行爲をする人程眞に心の滿足が得られる所以なのであります。

問　只今のお話で人間の優越性はよくわかりました。が然し自然界に於ける無形の偉大なる力の存在と、人間が理想の完成に向つて努力する事との間にどういふ關係がありませうか、自然觀と人間觀との關係に就て、も少しはつきりした説明が欲しいのですが。

大自然の動向と人類の使命

答　さうです。さういふ疑問は當然起つてもよい筈なのです。これ迄の一般の考へでは、例へば花より花へと飛んで行く蝶を捕へて顯微鏡下に調べて見れば、蝶の體が斯くの如くであると云ふ事は分つても、それでは生きて居る蝶はわからぬと同じやうに、自然科學は自然界を對象として夫れを分析して研究するのであるから、自然界が「斯くある」と云ふ事は夫れによつて解つても、人間が「斯くあらねばならぬ」と云ふ結論はそれからは出て來ない。言ひ換へると、人間の歩むべき道は自然科學ではなくて、人文科學のみの力によつて始めて明かにせらるべきものと一般に考へられて居るのです。是を此人生觀に就て云ふならば、自然觀と人間觀との關係がどうも明かでない、自然界に於ける無形の偉大なる力と、人間の努力との間にどういふ關係があるかと云ふ疑問が起るのです。

しかしそれは靜の自然のみでなく、動の自然、即ち大自然の動向を考

へれば直ちに明かになるのです。私は先に自然界には無形の偉大なる力が潜在して居ると申しましたが、その無形の偉大なる力は大自然の動向となつて現はれるのです。詳しく云へば、自然界に於けるあらゆる存在――宇宙、生物、人類、――それは何れも絶えず進化しつゝあるのでありまして、夫れが大自然の動向であるといふ事を知つたならば、吾等人間の歩むべき道は自ら明かとなるのであります。先づ宇宙全體として考察して見ませう。

天文學者の説によりますと、恒星は五乃至十萬億年前に現れたもので、地球の年齢は約二十億年であり、地球上に於ける生物は約三億年、地球上に人間が現れてからは約三十萬年を經たといふことでありますが、此等の數字の正否は別問題として、兎に角此宇宙は永遠の昔から今日の儘の狀態に於て存在したものではなく、段々に進化しつゝ今日に及び、今

も尙絶えず進化しつゝあるといふのが今日の天文學者の考で、所謂「宇宙進化説」といふのが夫れであります。

次に地球上に於ける生物の由來を考へて見ましても、初めから今日のやうな生物が存在したわけではなく、漸次に進化しつゝ今日の狀態に達したといふのが生物學者の説であります。初めは單細胞動物から段々に進化しつゝ系統的に發達して來たもので、脊椎動物になると魚類より兩棲類、爬蟲類、それから鳥類と哺乳類とに進化し、哺乳動物の內で最も進化したものが吾々人類であると考へられて居ります。動物進化の方法に就ては、自然陶汰であるとか、突然變異であるとか種々の學説がありますが、何れにしても動物が進化すると云ふこと、卽ち「動物進化説」そのものは、地質學や古生物學や比較解剖學などの發達に伴つて今日では一般に確かであると信じられて居ります。動物の進化とは主として頭腦の

發達を意味する事は勿論であります。

更に最も顯著なる進化の跡は人類の文化史に於て見る事が出來ます。即ち人類の歴史を顧みますと、原始人は互に掠奪と征服とを事とし、其生活は動物に近かつたのでありますが、時代を經るに從ひ、それから遠ざかつて段々に文化の建設に努力し、漸次に文化人として生活するやうになつた。即ち大局より見れば、人類も亦絶えず進化しつゝある事は確かでありまして、それが「大自然の動向」であります。動物進化の過程に於ては所謂弱肉强食、適者生存と云ふやうな事が見られたのでありますが、人類の進化は眞の意味に於ける文化の建設を意味し、文化の建設とは結局理想の完成に向つて努力する事に外ならないのであります。從つて之を民族的に觀察するならば大自然の動向に一致して、眞、知、善、愛、美――これ等理想の完成に

向つて努力し、進化より向上へ、向上より進化へと進み、眞の意味に於ける文化の建設に努力する民族は榮え、さうでない民族は次第に衰へて自滅に向ふのであります。それは有史以來の民族興亡史に見ても、或は現存せる各民族の實際の狀況に就て見ても明かなる事實であります。その關係は各個人に就ても全く同樣です。

大自然の動向は自然界に潜在せる無形の偉大なる力の現はれであり、神祕なる絶對的存在の動きであります。それ故に、吾々人間も亦自然の一部分である以上、すべての人は大自然の動向に一致して、どこまでも理想の完成に向つて努力しつゝ人生の道を歩むより外に道はありません。それが人類に與へられた使命であります。從つて此理想の完成に向つて絶へず努力をする人こそは眞に力强い人生を送ることが出來るのでありますが、之

に反して單に生命の保持、種族の繁殖といふ事が基となつた行爲のみをして居る者は、決して力强い生涯を送る事の出來ないのが實際の事實であります。

生死を超えて

最も力强く最も幸福な感謝の生涯を送るには、前述の如き自然觀と、生命觀と、そして人間觀とに立脚し、理想の完成に向つて努力しつつ刻々を過すより外に道はありません。ただ物質に惠まれて居るだけでは眞に力强き、幸福な、感謝の生涯を送る事の出來ないのは當り前であります。何故なら物質に對する所有慾は、生命の保持と云ふ動物に共通な根本性質が基となつて起つて來る本能的慾望の現はれに過ぎないからであります。それですから物質許りを目標に

して進んでも、それでは本當の心の滿足は得られないはずです。

結婚してよい家庭を創る。それから事業に成功して金を得る。それだけではまだ眞の心の滿足が得られず、もつと心の中に足りない何物かを要求するのが實際の狀況でありますが、其理由は前に述べた所によつて自ら明かであると思ひます。

それ故に、すべての人は先程言つた自然觀と生命觀とを充分よく理解して、自分も自然の一部分である事、そして無形の偉大なる力に依つて出來、それによつて支配されつつ存在して居る事を先づ心の中にしつかりと摑み、己が心を無形の偉大なる力に通はせて、大自然の動向に一致し、言ひ換へれば自然に對する奉仕の念を以て、眞、知、善、愛、美、此五

つの理想の完成に向つて努力せよ。斯くの如くして一生を送つたならばその人の心は絶えず前途の光明に滿されつつ、最も力强い、最も幸福な、感謝の生涯を送る事が出來るのであります。

今の世の中では運命と云ふか、偶然性と云はふか、いつ豫期しない突發的の出來事に遭遇しないとも限らない、從つてたとへ今日物質に惠まれて非常に順調な生活を送つて居つた所で、何時悲哀のどん底に落ちないとも限らない。さういふ時にも己が心を自然界に潛在する無形の偉大なる力に通はせて居れば、自分の心の中に賴る所があるから、なにもう一度努力しやうといふので再び勇氣を取戻して押切つて行くことが出來

る。それですから斯ういふ人生觀に生きて居れば決して碎けることがない。又此世の中に於ては近親の死、友人の死、親の死、兄弟の死、さては吾子の死に遇はない者が果して幾人ありませうか。斯かる際にも前に述べたやうな生命觀、人生觀を持つて居れば情に於て悲しくとも、再び力强く努力して行くことが出來るのです。また自分が死に直面しても歸するが如き態度を持する事が出來るのであります。

問　では此人生觀は日常生活にどういふ影響がありませうか。またよく心の修養と云ふ事を申しますが、それは此人生觀に就て云ふと、どういふ事になりますか？

心の修養と社會的知識

答　前に述べた自然觀と、生命觀と、そして人間觀とを充分よく理解

してすつかり自分のものにして終へば、そこには人生に對する信念と云ふものが出來て來る。人生に對する信念、卽ち確固たる人生觀は自ら實際の日常生活に於て現はれるのです。

凡て此人生觀に生きる者は、自分が人として此世に生を享けたる事を感謝しつゝ、嚴肅にそして朗らかにその日その日を過します。たとへ自分がどんな不幸な境遇にあつても決して心をとり亂さないで、どこまでも更生の爲に努力をつゞける事が出來るのです。また此人生觀に生きる者は常に『愛』を以て隣人に接します。實に共同生活の基調をなすものは人間相互の愛であり、人生はたゞ愛によつてのみ支持され、そして動いて行くのです。若し隣人が病める場合には一時も早く癒るやうにと心の中に祈りつゝ、その純眞なる麗はしき同情の念は直ちに手厚き看護となり、正しき醫療となつて現はれて來ます。また不幸にして自分が病床に

惱むやうな場合にはそれこそ却つて內省しつゝ心の修養をする爲めの好機會であると考へて、あせる事なく徐ろに恢復の時期を待つでありませう。病氣とか、不幸な境遇とか、さういふ場合にこそ却つて眞(まこと)の人生を把握する事が出來るのです。

また職業の點から云ふならば、どんな職業に從事する者も皆この人生觀によつて生き、理想の完成に努力しつゝ力强き人生を送ることが出來るのであります。

所が人間は誰でも、一面に於て動物に共通な本能的の慾望を持つて居る。そこで夫れをどこまでも美化し理想化して行かねばならない。それが實際に當つては非常に困難な事で、やゝともすると本能的の慾望の方についい心を引かれてしまふ懼れがある。それですからすべて慾望と名のつくものを克服して、それを理想化し、理想に一致させて行く爲には絕

えず心の修養を怠つてはならないのです。

佛教では人生の一切は苦なり、苦は慾望より生ず、それ故に苦より解脱せんとせば慾望に對する執着を捨てなければならぬ」と訓へ、またキリスト教に於ては、慾望のない者はない所から、すべての人間は罪ありとし、悔ひ改めよ、然らば救はれん」と訓へて慾望から去らしめやうと努めた。斯くして何れも慾望を離れ動物性から脱却せしめやうとした事は、その內容が大自然の動向に一致して居るわけで、從つて共に大宗教として長い年月に亘り人々の心を支配する事の出來た所以であり、其點は確かに二大宗教の人類文化への非常に大きな貢獻であると思はれます。

然しながら吾々人間も尊い生命を保持しなければならず、また種族の繁殖をも計らねばならぬのであるから、すべての慾望を完全に捨てゝしまふわけには行かぬ。只それを理想に一致させて行けばよいのです。そ

して其爲には各人の心の修養が非常に必要になるのです。それ故に吾々は常に自ら深く反省しつゝ絕えず心の修養をしなければなりません。

修養の根本は先程言つた自然觀と、生命觀と、そして人間觀とを充分によく體得する事でありますが、なほ忍耐、克己、謙讓、敬虔、節制は何れも人々の心の糧となるのです。平たく云へば、心驕り高ぶるな、怒るな、惡しき者に反抗するな、罵るな、他人を批判する前に自らを省みよ、侮るな、嫉妬むな、人を怨むな、名利を追ふな、心は潔く正しかれ。

また一面に於て吾々は初めから社會人として生れて來るのでありますが、社會の狀態は文化の發展に伴つて益々複雜になる傾向があり、從つて社會と個人との關係も亦だんだんに複雜さを加へて來るばかりであります。夫れ故に大自然の動向に一致し、言ひ換へれば自然に對する奉仕

の念を以て、どこまでも理想の完成に努力しつゝ力強き人生を送らうとするならば、個人としての心の修養のみではまだ充分でない。それと同時に社會に關する正しき知識が非常に必要になるのです。そして人々はその社會的知識に基づいて――それぞれ自己の能力に適した方面に於て――理想の完成に向つて努力しつゝ生活し得るやうな社會的環境の中に自分を置くやう絶えず心がけねばなりません。所謂處世術や生存競爭なる言葉は須らく此の意味に解釋せられねばならぬのです。

問 お話は非常によく解りました。しかし各人が理想の完成に向つて努力しつつ生活しやうと思つても、今日の社會の情勢で果してそれが許されるでありませうか？

より良き社會の建設へ

答 元來良き社會狀態に於ては、人々はそれ〴〵自己の能力に適した方面に於て、理想の完成に努力しつつ生活して行く事が出來る筈なのです。所が現今の社會は決して完全なものではなく、各人が理想の完成に向つて努力しつゝ生活しやうと思つても、それがかなり困難な現狀にあるのです。それ故に吾々は絶えずより良き社會の建設へと努力しなければならないのです。そしてそれには先づ正しい人生觀を持つ事が絶對に必要なのです。より良き次の社會、より良き次の時代は實に各人の正しき人生觀より生れるのであります。

今實業家が此人生觀を持つて居れば、自分の事業が若し非常に成功し、多くの物的剩餘を生じた場合には言はずして社會的に使ふとか――それは善であり愛である――または何か理想の完成に向つて使はれるに相違ない。必要以上の物的剩餘をぢつと家の中に貯めて置くといふやうなこ

とはなくなる筈である。政治家が此人生觀に生きて居れば最も良き政治を行つてすべての人々を眞に幸福にしやうと云ふ考へになる。學者にしても軍人にしても、また農業に從事する者も、勞働者も、何れも同じやうな氣持に於て生きることが出來るのです。

それであるから世の中の人々すべてが此人生觀を持つやうになつたならば、啻に各人が最も力强き幸福な感謝の生涯を送り得るのみでなく、其曉には此世の中は社會的に見ても、國家的に見ても、或は又精神的に見ても、物質的に見ても、あらゆる點より見て最も理想的な狀態になるのであります。

此世の中を最も理想的なものにするには此人生觀を一人でも多くの人に體得させるのが最も根本的であるのです。今後は學校教育に於ても益々科學を教へ込むから、科學を基礎とした人生觀は益々人々の頭に這入

り易くなるに相違ない。而かも此の人生觀には假定がない、嘘がない。すべて事實に基づいて居るのであつて、而かも斯うすれば力强い幸福な感謝の生涯を送り得ると云ふ吾等人間の進むべき道が示されて居るのであります。

世の人々が此人生觀によつて生きるやうになれば、獨り個人的のみでなく、何れの方面から見ても最も理想的な社會が出現するわけで、言ひ換へると、此世の中は地上の樂園と化するのであります。一見非常に迂遠なやうに見えて而かも最も捷徑な社會改造の道は一に此人生觀の普及にあるのです。それ故に私はすべての人が此人生觀に生きる日の一日も早からん事を祈つて止まないのであります。

明日の社會は今日の青年によつて形づくられるのである。明日のより良き社會は、今日の青年男女の正しき人生觀より生れ出づるのである。

諸子よ！　共に志を同じうして、より良き次の時代の創造へ、より良き次の社會の建設へと進まうではないか。

記者　實によいお話を伺ひました。大變有り難うございました。

——（終）——

私の人生觀

額田晉

人生は果して何を意味するか。各人はそれに對して確固たる信念をもたなければならぬ。

およそ自然界は物質から成り立つて居る。だがすべての物質は——生物も、無生物も——法則によつて支配されて居る。法則は偉大なる無形の力だ。それは神祕なる絶對的の存在なのだ。自然科學はこの法則を知り且つそれを應用する事に努めてゐるが、法則そのものは永遠に不變である。

物質がある組合せを作ると、そこに生命なる機能が現れて來る。ある時間を經過すると組合せが崩れる。生命は失はれて物質は自然に還る。それが死だ。生命のある間も、死後も、すべては大自然の法則に從つて流れて行く。

人間は理想の完成に向つて努力をする。そこに人類の特長があるのだ。だが一面においては人間も動物だ。生きて行かなければならない。種族の繁殖をも計らねばならぬ。でなければ人間としての使命を果すことが出來ないのである。

生命は尊い自然の贈り物である。人生は自然に對する奉仕である。人生の意義は努力にあるのだ。世人よ、全人類の幸福の爲に努力せよ！

（昭和七年八月十六日報知新聞所載）

昭和十一年十一月十五日改訂第八版印刷
昭和十一年十一月二十日改訂第八版發行　（定價金二十錢）

東京市大森區大森五丁目
編輯兼發行者　利　久　茂

東京市神田區三崎町二丁目二ノ四
代表者　長　久　茂

東京市神田區神保町二丁目十七
印刷所　一　匡　印　刷　所

東京市神田區神保町二丁目十七
發賣所　書肆　有　斐　閣
電話九段（33）〇三二二〇三二三
振替口座東京三七〇番

715
71

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black